

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第370集

西田島遺跡

太田西女子高等学校フレックス棟新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2005

群馬県教育委員会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第370集

西田島遺跡

太田西女子高等学校フレックス棟新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2005

群馬県教育委員会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

昭和23年10月に県立太田女子高等学校の尾島分校として出発した群馬県立太田西女子高等学校は、昭和35年に現在の校地に移転し、「家庭に関する専門学科（家政科）」を有する特色ある教育で、以後、長きにわたって多くの有為な女性を育成して参りました。

平成17年度入学者より、県立高等学校としては全く新しい履修方法を実施する男女共学の太田フレックス高等学校に生まれ変わることが決定されたため、平成16年度に新しい教育内容に適應できる施設を校内に新設することとなり、県教育委員会から当事業団に発掘調査が委託されました。

同校の校地は、戦国時代に築城され、その後、中世豪族・新田氏の一族で旗本の岩松氏が居館とした下田烏城（岩松城）の故地にあたっております。往時の土塁の一部や堀跡などが現在も校内に遺されており、これまでもたびたび校舎の増設にともなって発掘調査が実施され、中近世居館の堀跡のみならず、縄文時代の遺構や古墳跡なども検出されております。

今次の調査は、小規模な調査ではありましたが、新たな古墳跡や中近世の下田烏城の建物の柱跡などが検出され、下田烏城やその周辺地域の歴史をより詳しく解明する上で、重要な成果を得ることができました。

本報告書の刊行に至るまでには、群馬県教育委員会事務局管理課、群馬県立太田西女子高等学校、太田市教育委員会はじめ関係諸機関並びに関係各位に大変なご尽力を賜りました。ここに銘記して心よりの感謝を申し上げますとともに、本報告書が広く資料として活用されますことを願ひまして、序といたします。

平成18年1月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 高橋 勇 夫

例 言

1. 本報告書は、太田西女子高等学校フレックス棟新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 遺跡の所在地は、群馬県太田市下田島1243-1番地 群馬県立太田西女子高等学校内である。調査区は近世の下田島城の内部に該当する。昭和60年以来同校の校舎増築・建替に伴って過去3次にわたって群馬県教育委員会文化財保護課（当時）によって発掘調査が行われ、「西田島遺跡」（昭和62年）、「西田島遺跡」Ⅱ（平成元年）の2冊が刊行されているため、今回も「西田島遺跡」を遺跡名とした。
3. 本発掘調査および整理事業は、群馬県教育委員会（管理課）の委託を受けた財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 調査対象地は、校地の中央部やや北西寄り、もとプール施設が所在した場所に当たる1,180㎡である。
5. 調査期間及び調査担当者

- (1) 発掘 平成16年10月1日～11月30日、担当：東毛調査事務所調査研究部調査研究第3課 専門員 高島英之
（契約期間：平成16年9月15日～平成17年1月31日）
- (2) 整理 平成17年12月1日～12月31日、担当：事務局資料整理部資料整理第2課 専門員 高島英之
（契約期間：平成17年11月1日～平成18年3月31日）

(3) 調査整理機関組織事務体制

役 員	理事長 小野宇三郎（平成16年度～17年7月）、高橋勇夫 常務理事 住谷永市（平成16年度）、木村裕紀
事 務 局	事業局長 神保脩史（平成16年度）、津沢吉茂 資料整理部長 中東耕志、資料整理第2課長 相京建史 総務部長 矢崎俊夫、総務課長 宮前毅雄、総務係長 竹内宏、同係主幹 須田朋子・今泉大作、同係主任 栗原幸代、経理係長 石井清、同係主幹 吉田有光、同係主任 清水秀紀・佐藤聖行
東毛調査事務所	所長 平野進一、調査研究部長 真下高幸、調査研究第3課長 中沢悟（平成16年度）、庶務課長 笠原秀樹、同課副主幹 柳岡良宏・今泉大作（平成16年度）、同課主任 清水秀紀（平成16年度）

6. 報告書作成関係者

- (1) 本文執筆、編集、遺構写真撮影 高島英之
 - (2) 遺物写真撮影 資料整理第1課主幹 佐藤元彦
 - (3) 遺物同定指導助言 資料整理第2課専門員 大西雅広（近世陶磁器）・主任調査研究員 深澤敦仁（埴輪）
 - (4) 整理作業 資料整理第2課整理補助員 萩原鈴代・徳田澄子・広瀬綾子・鷲尾房江・丹羽悠・長岡久幸
7. 出土遺物・図面・写真類は、一括して群馬県埋蔵文化財調査センターに保管している。
8. 発掘調査及び報告書作成に際しては、下記の関係各機関及び各位にご高配・ご指導・ご教示を賜った。記して深甚なる謝意を表する。

群馬県教育委員会、太田市教育委員会、群馬県立太田西女子高等学校、鎌倉考古学研究所
近藤義雄（かみつけの里博物館長）、峰岸純夫（中央大学名誉教授）、瀬田哲夫（鎌倉考古学研究所）

凡 例

1. 本報告書に掲載する遺構平面図の方位記号は、国家座標の北を表す。座標系は国家座標区系である。今回の調査区は、 $X=29180\sim 29220$ 、 $Y=-46260\sim 46295$ の範囲に取まる。
2. 遺構断面実測図に示した標高値の単位はmである。
3. 遺構平面実測図・遺物実測図の縮尺は各図にそれぞれ示した。
4. 遺構の土層及び土器の色調の表現は、農林水産省農林水産技術会事務局監修・財団法人日本色彩研究所色原監修『新版標準土色帳』1993年版に準拠した。
5. 遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表・写真図版ともすべて共通している。

目 次

序

例言

凡例

第1章 調査に至る経緯と調査経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	2
第2章 遺跡の地理的・歴史的環境	3
第1節 地理的環境と周辺遺跡の状況	3
第2節 下田島城主岩松氏の歴史の変遷	6
第3節 下田島城調査の変遷	8
第3章 発見された遺構と遺物	12
第1節 古墳時代の遺構と遺物	12
第2節 近世・近代の遺構と遺物	15
まとめ	21
写真図版	

図 版 目 次

図1 西田島遺跡グリッド配置図	2
図2 西田島遺跡と周辺の遺跡	4
図3 西田島遺跡全体図	10

図4	下田島城縄張り図	11
図5	下田島城周辺地積図	11
図6	西田島4号墳全体図	13
図7	西田島4号墳周溝内出土遺物・関連遺物	14
図8	1号柱穴列跡平面図・エレベーション図	16
図9	2号礎石建物跡平面図・エレベーション図・掘方エレベーション図	16
図10	遺構外出土遺物(1)	18
図11	遺構外出土遺物(2)	19
図12	遺構外出土遺物(3)	20
付図	近世下田島城建物跡柱穴群全体図	

写真図版目次

PL.1	西田島4号墳周溝跡全景・土層断面、下田島城跡現況
PL.2	下田島城1号柱穴列跡、下田島城建物跡 pit 群
PL.3	下田島城建物跡 pit 群、西田島4号墳出土遺物
PL.4	西田島4号墳周溝出土遺物、下田島城関連出土遺物

第1章 調査に至る経緯と調査経過

第1節 調査に至る経緯

群馬県立太田西女子高等学校は、昭和23年10月に群馬県立太田女子高等学校尾島分校として当時の尾島町堀口に開校し、昭和35年5月に現在の校地である太田市下田島に移転した。昭和40年4月には群馬県立尾島女子高等学校として独立、昭和58年4月には群馬県立太田西女子高等学校と校名を改称、現在に至っている。同校は公立高等学校としては数少ない家庭に関する専門学科（家政科）を有する学校として、長きにわたって地域における女子教育に大きな足跡を残してきた。

平成17年度の新入学生から、全く新しいスタイルによる履修方法による男女共学・単位制の群馬県立太田フレックス高等学校として生徒を募集するにあたって、新しい教育内容に対応可能な設備を有する施設（フレックス棟）を、校地の中央部や西北寄りの、もとプールがあった場所に建設することになった。

校地は、近世に中世豪族・新田氏末裔の交代寄合格旗本の岩松氏が代々居城とした下田島城の内郭にあたり、これまで校舎の増築などに伴い三次にわたって発掘調査が行われてきたので、今回の新校舎建設予定地でも埋蔵文化財の包蔵が予想されていた。

県立学校建設を主管する県教育委員会事務局管理課からの新校舎建設予定地における埋蔵文化財の取り扱いについて照会がなされたことを受けて、平成16年7月23日に県教委文化課が新校舎建設予定地で埋蔵文化財の確認調査を実施したところ、埋蔵文化財の包蔵が認められた。管理課と文化課の間で協議がなされたが、翌年4月の太田フレックス高校の開校日程が切迫し新校舎建設が急務であること、また建設箇所を移転したとしても校地内がすべて下田島城の郭内にかかっているため、どのみち遺跡の存在は回避であると判断され、やむを得ない状況であるということで、工事に先立って埋蔵文化財の発掘調査による記録保存の措置を講ずることになり、フレックス棟建設予定地1,180㎡一カ所を対象とした発掘調査が当事業団に委託されることになった。

発掘調査は平成16年10月1日より東毛調査事務所調査研究部が担当した。なお、これまでに実施された同校内での発掘調査及び今回の発掘調査の面積、概要等は下表の通りである。

表1 群馬県立太田西女子高等学校校内発掘調査の変遷

調査次数	調査年・期間	調査機関	調査原因	調査対象面積	検出遺構	報告書
第1次	昭和60年11.7. ～11.9.	県教委文化財保護課	校庭拡張(確認調査)	4553.0	古墳跡2	2
第2次	昭和61年8.18. ～9.5.	*	校舎増築	218.5	縄文時代後期土坑跡15	1
			セミナーハウス・同窓会館建設	322.0	下田島城西堀跡、近世土坑墓跡1	
第3次	昭和63年5.23. ～7.5.	*	体育館建設	1940.0	古墳跡1、下田島城北西隅部堀跡2、近代礎石建物跡1	2
第4次	平成16年10.1. ～11.30.	当事業団	フレックス棟建設	1180.0	古墳跡1、近世ピット跡184、近代礎石建物跡1	本書

報告書1 群馬県教育委員会編「西田島遺跡発掘調査報告書 昭和61年度」昭和62年3月31日

2 群馬県教育委員会編「西田島遺跡発掘調査報告書Ⅱ—下田島城跡の調査—昭和63年度」

平成元年3月31日

第2節 調査の経過

平成16年8月過ぎから、事業主管課である県教委管理課と同文化課、当事業団との間で、発掘調査にむけての協議がたびたび持たれ、その結果、県教委管理課と当事業団との間で交わされる埋蔵文化財発掘調査委託契約期間を平成16年9月15日から平成17年1月31日とし、発掘調査の作業を10月初頭から11月末にかけて行うこと、調査対象面積を新校舎フレックス棟建築部分と基礎掘削部分あわせて1,180㎡とすること、新校舎フレックス棟とその北側にある現校舎とを結ぶ渡り廊下部分及び建設工事に伴って校庭内に臨時的に設置されるプレハブの仮校舎の建設予定地については、設置工事にあたって地表面の掘削がほとんど無いということなので調査対象とはしないこと、などの諸事項が取り決められた。

発掘調査は当事業団東毛調査事務所調査研究部（担当：調査研究第3課）が実施し、同年、10月1日から表土掘削を開始、10月8日から本格的な発掘作業に着手した。

調査区の測量基点は国家座標新日本測地系第Ⅸ系X=29180、Y=-46260に設定し、各グリッドは5m四方を一単位とし、調査区内に40グリッドを設定した。グリッドは国家座標X軸とY軸との交点の数値をそのまま呼称した。

遺構調査は11月4日に終了し、その後11月10日まで旧石器の確認調査を行ったが、旧石器時代の遺物は全く確認されなかった。その後、調査区の埋め戻し、整地作業を行い、11月16日に発掘作業を終了して現場から撤収。調査箇所を事業委託者に引き渡した。その後、月末まで関係事務手続き、基本整理を行った。

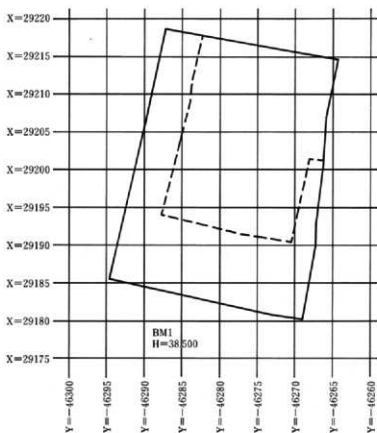


図1 西田島遺跡グリッド配置図 (1/500)

・発掘調査日誌抄

10月1日重機による表土掘削着手。10月8日遺構確認調査着手。10月27日旧石器確認トレンチ調査着手。
11月4日遺構面調査終了。調査遺構は古墳堀跡1。近世ビット184。近代礎石建物跡1。11月10日旧石器
確認トレンチ調査終了。旧石器時代の遺物は全く確認できず。11月12日調査区の埋め戻し・整地。発掘
調査終了、現場撤収。11月16日事業委託者へ調査地引渡し。11月30日基本整理、諸事務終了。
整理作業は当事業団資料整理部（担当：資料整理第2課）が担当し、当事業団岩神分室において平成17
年12月1日から31日まで1ヶ月間実施し、年度末に発掘調査報告書を刊行した。

第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境と周辺遺跡の状況

位置 西田島遺跡は太田市の南西部、下田島1243-1番地に所在する群馬県立太田西女子高等学校を中心とした遺跡で、東武伊勢崎線木崎駅の約700mの位置にあたる。南側は旧尾島町、西側は旧新田町との境に近い場所である。

地形 地形的には大間々扇状地の末端部にあたる。大間々扇状地は、南流する渡良瀬川によって形成され、大間々町一帯を扇頂部として、現在の桐生市、太田市、伊勢崎市北部などの地域にまたがり、扇頂から扇端まで南北約20km、東西約15kmの規模を呈する関東平野第三位の巨大な扇状地である。渡良瀬川はその後、八王子丘陵の東側に流路を変えているため、現在は現流河川のない欠水性の扇状地となっており、近世に用水路が開削されるまでは笠懸野と称される不毛の土地であった。この扇状地は、この地方の遺跡の立地に大きく関わっている。

立地 扇状地の側端や末端には湧水がみられ、これらの湧水に端を発する石田川や蛇川が扇状地末端以南の沖積地を南流している。この沖積地の中に木崎台地や由良台地などの洪積台地や島状の微高地が点在している。本遺跡は、この太田市新田木崎を中心とした北西から南東方向に細長く伸びる木崎台地の南東端に立地し、標高は38.5mである。遺跡地の南側には石田川が東流し、氾濫原の低地が形成されている。石田川の南側には利根川左岸の自然堤防上に形成された尾島市街地が接しており、遺跡地から利根川までは南に約2.5kmである。太田市南西部のこの一帯の地域には、旧石器時代以来の多くの遺跡が知られている。

旧石器～弥生時代の遺跡 旧石器時代の遺物は、木崎台地西端の中江田遺跡など、扇状地の末端で多く確認されている。縄文時代草創期・早期の遺跡は木崎台地西端に点在している。前期になると草創期・早期の遺跡と重なりながらもやや広がりを見せ、木崎台地の北端から東端にも広がっている。中期には、前期の遺跡と重なりながら扇状地末端にある湧水を取り囲むように面的な分布がみられるようになるが、木崎台地・由良台地両縁辺部でも多くの地点で分布している。後期の遺跡は前期の遺跡と類似した傾向を有するが、中期に比べると遺跡の分布地点も減少し、面的にも縮小している。晩期の遺跡はまだこの地域では発見されていない。弥生時代の遺跡は、現在のところは扇状地末端、木崎台地、由良台地の北寄りの部分や沖積地の微高地上にわずかな分布がみられるのみである。

古墳時代の遺跡 古墳時代前期には、扇状地末端、由良台地、沖積地内の微高地に面的なひろがりをもつ



- 城館跡 ● 古墳
- 伽藍池 ○ 古墳群

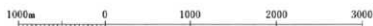


図2 西田島遺跡と周辺の遺跡 (国土地理院 1:50,000「深谷」使用)

表2 周辺の主な城館遺跡

番号	城館遺跡名	所在地	概要・典拠
1	道忍屋敷(西今井館)	伊勢崎市境西今井	今井惟氏館?(長楽寺文書)。妙見寺の西に接し、堀・土居が一部遺存。
2	三ッ木城	伊勢崎市境三ッ木	16世紀。根岸氏館(永禄日記、産生文書)。真福寺境内。堀・土居が一部遺存。S53~54調査。
3	新田義重館	太田市世良田町	12世紀。新田本宗家(吾妻鏡)南部に総持寺あり。堀一部遺存。S51調査。
4	世良田氏館	*	13世紀。吾妻鏡。長楽寺西接。堀一部遺存。S62・63調査。
5	長楽寺	*	14世紀。世良田得川義季(長楽寺文書・正文書・永禄日記・矢内文書ほか)。堀・土居一部遺存。
6	安養寺	太田市安養寺町	14世紀。太平記。S63一部調査。
7	大館館	太田市大館町	14世紀。大館氏(太平記・由良文書)。堀跡一部遺存。
8	得川館	*	12世紀。世良田得川義季・正田氏(吾妻鏡)。
9	堀口館	太田市堀口町	14世紀。堀口氏(太平記)。現・早川堤防敷。
10	岩松館	太田市岩松町	14~15世紀。岩松氏(正文書)。現在青蓮寺があり館はその西南。堀。土居一部遺存。
11	綿打館	太田市新田大根	14世紀。綿打氏。大慶寺境内。堀の一部が遺存。
12	田中館	太田市新田上田中	14世紀。田中義清。長楽寺境内。堀・土居・虎口一部遺存。
13	江田館	太田市新田上江田	13世紀、16世紀。江田頼有(清水文書・北爪大言巻)、堀・土居・戸口等遺存。郭外に数層敷地あり。
14	反町館	太田市新田反町	14世紀、16世紀。新田本宗家義貞。照明寺境内。堀・土居・虎口等遺存。
15	村田館	太田市新田上野井	村田氏。堀・土居の一部遺存。S60一部調査。
16	小金井館	太田市新田小金井	16世紀。小金井繁光。堀・土居一部遺存。
17	下田島城(岩松城)	太田市西田島	15~17世紀。岩松頼政(新田家譜、北爪大言巻)、吾妻綱朝。堀・土居・虎口等一部遺存。S60、61、62調査。
18	脇屋館	太田市脇屋	14世紀。脇屋義助(太平記)。
19	新田館	太田市別所	14世紀。新田本宗家・新田政義。西側に円福寺。堀の一部が遺存。
20	生源氏館	*	14世紀。新田本宗家。伝新田義貞生誕地。岩松満地居所?。
21	由良砦	太田市由良	14~16世紀。横瀬由良氏(永禄日記)。岩松満地居所?。堀・土居・虎口一部遺存。

*群馬県教育委員会「群馬県の中世城館跡」1988による。

た遺跡の分布が確認できる。特に由良台地西縁部や利根川自然堤防の縁辺部、それらに接する微高地上に比較的大きな遺跡の分布がみられ、前期末から中期初頭には高林の朝子塚古墳、中期中葉には由良台地西縁に円福寺茶臼山古墳、中期後半には鳥山の鶴山古墳などの大型古墳が造営されている。しかしながら、木崎台地上に分布する古墳時代前・中期の遺跡はわずかであり、この点は、現流河川が存在しない欠水性の扇状地という地形的な制約によるものと考えられる。

古墳時代後期になると、こうした地形的な制約が急速に克服され、扇状地末端の由良台地や木崎台地縁辺部でも台地上や沖積地内の微高地にまで遺跡分布が拡大する。大間々扇状地末端や木崎台地、尾島の自然堤防上などでは小円墳が数基で点在している。太田市西北部の成塚や富沢地区では数十基の古墳が群集している。本遺跡でこれまでに検出された4基の古墳も、この時期のものである。本遺跡一帯では、かつて二十数基の古墳が存在していたと言うことであるが、現在はほとんどが削平されている。

古代の遺跡 奈良・平安時代の遺跡は、古墳時代後期の遺跡をほぼ踏襲しつつもさらに拡大し、台地上での展開は一層顕著になる。扇状地の南端には律令制期の新田郡家跡(天良町天良七堂遺跡)や古代寺院跡(寺井庵寺)など律令制期の新田郡における重要施設が集中し、東山道駅路(牛堀・矢ノ原ルート)及び並行する下新田ルート)が東西方向に貫通している。扇状地末端の南側に広がる沖積地の水田地域には用水路が

いくつも開削され、この地域の開発が広く進められた様子が判明している。

中世の遺跡 中世の館の分布は太田市西部の旧新田町域に多く、現在三十数地点において確認されている。太田市新田反町の反町館、同新田上江田の江田館など城館規模のものから、50m規模の区画を持ったもので様々である。反町館・江田館クラスの郷領主層武士の居館は方一町規模が標準的である。太田市新田村田の村田・中溝遺跡（田中屋敷、16～18世紀、戸崎氏居部か）、同新田市野井の市野井・本郷A館跡（15世紀末、岩松氏被官広瀬氏館跡）などのような方70～80mの二重堀の構えは、戦国大名家臣クラスの屋敷とみられ、同新田高尾の台遺跡や新田上江田の上江田・東田遺跡で検出された北屋敷遺構などの方50m前後の構えは有力農民層「在家」の屋敷ではないかと推定される。

第2節 下田島城主岩松氏の歴史の変遷

調査対象地である県立太田西女子高等学校の校地西半は、近世に、中世豪族新田氏の末裔を称した岩松氏の居城であった下田島城（岩松城）と称される城館跡である。

新田荘の成立と新田氏 12世紀、上野国の平野部には、天仁元年（1108）の浅間山大噴火による降灰によって壊滅した耕地を復興する過程で、各地に荘園や御厨が成立していった。仁安3年（1168）の「新田義重讃状」に示されている新田荘もそれらの一つとして形成された荘園である。周知のように、源義家の三男である源義国が勧誘を被って坂東に下向、土着し、その長男・源義重（？～建仁2年〈1202〉）が上野国新田郡に入部して開発し、久寿元年（1154）頃には新田郡南西部の「こかんの郷々」とよばれた19郷からなる荘園を成立させ、これを権門貴族である藤原忠雅（領家）と金剛心院（本所）とに寄進した。義重は、保元2年（1157）に下司職に任命され、新田荘を立荘、新田庄司を称した。嘉応2年（1170）に提出された「新田荘目録」によれば、新田荘は56郷、田畑約400町歩、在家250戸程度の規模に拡大し、新田郡一円を占めるに至った。この「新田荘目録」にあげられた56の郷名の中には、「村田」「市野井」「大根」「上江田」「本崎」「由良」「下田島」など現在の太田市西部の大字と共通する地名が多くみられ、本遺跡に関わる「下田島」の地名もここまで遡ることがわかる。

新田氏（本宗家）の滅亡と岩松氏による支配 建武政権下、元弘3年（1333）の鎌倉攻めで勲功のあった新田本宗家の義貞・脇谷義助兄弟は、新政府において重用されたのであるが、その後も南朝方について新田本宗家は南朝方の没落ととも滅亡し、新田荘の故地は源義国の長男である新田義重の孫女と、義国の次男である足利義康の孫の畠山（足利）義純との間に生まれた畠山（足利）時兼を祖とし、岩松郷（太田市岩松町）を本拠とした足利方の岩松氏が支配することになった。

建保3年（1215）、畠山（足利）時兼は、外祖父にあたる新田義兼の後室・新田尼より新田本宗家の所領である新田荘田島郷など12郷を譲られて地頭職に任じられ、さらに嘉禄2年（1226）には岩松郷の地頭職をも併せ、岩松郷に居住。岩松を苗字として名乗った。新田本宗家領を一部相続したことによって、父系からみれば足利氏系である岩松氏は、新田一族の有力庶子家として新田荘内に勢力をふるうようになった。また、岩松時兼の嗣子・経兼と世良田得川頼有の女との間に生まれた岩松氏三代目当主の政経は、後に母から得川郷などを譲り受け、岩松氏は世良田得川氏の名跡をも継承することになった。

岩松氏の変遷 元弘3年（1333）年の新田義貞による鎌倉攻めに際して、岩松政経の子の経家が新田軍に属して功があったが、中先代の乱の際に討死。その後、新田本宗家が終始南朝方に従うなか、岩松氏一党は

敵対する足利方に属して各地に戦い、奥国元年・暦応3年(1340)の親定の擾乱に際しては、岩松直国が足利専氏方として活躍。岩松直国の嗣子・満国の養子・満純は、岩松直国の女と新田義貞の三男・義宗との間に生まれた子であり、岩松氏は、新田本宗家の血を引く家柄として、新田氏一門の立場をより強固にした。

応永23年(1416)、前関東管領上杉禪秀氏が鎌倉公方足利持氏に対して起した上杉禪秀の乱で、岩松満純が新田党を糾合して新田満純と名乗り、上杉禪秀方に与するも敗死。岩松家の家督は持国が継ぎ、岩松満国・持国らは鎌倉公方に寝返った。新田満純の遺子・長純は、永享9年(1437)、永享の乱が勃発すると、將軍足利義教に召し出されて鎌倉公方討伐軍の将に任じられ、その戦功によって岩松氏の家督を回復して岩松家純と称した。そのため、岩松氏は家純の礼部家と持国の京兆家と二家に分裂した。

享徳3年(1454)、享徳の乱が勃発し、岩松京兆家の持国は古河公方足利成氏方に、また岩松礼部家の家純は堀越公方足利政知方に通じたため、両家の抗争が激化。結局、礼部家の家純が京兆家の持国・成純父子を謀殺し、岩松家は家純の系統に一統される。

文明元年(1469)、岩松家純は五十余年ぶりに本領である上野国新田郡を回復し、家臣の横瀬国繁(岩松満純の弟・新田貞氏の末裔)をして金山に城を築かせたが、次第に執事・横瀬氏が家内で力をふるうようになっていった。横瀬氏の専横に憤った岩松尚純・昌純父子は、享禄年間(1528-32)、横瀬氏排除の陰謀を企てたが、逆に横瀬氏に攻められて自害。昌純のあと家督を継いだ弟の氏純も、実権は横瀬氏に握られ、ついには自害させられた。氏純の子の守純は金山城を追われて山田郡菱(現・桐生市菱)に隠棲。岩松氏は家臣横瀬氏の下廻上によって没落した。隠棲していた岩松守純・豊純父子は、その後、慶長12年(1607)に徳川家康に召し出されて謁したが、不興を買い、扶持として新田郡市野井(太田市新田市野井)にわずかに20石を与えられたにすぎなかった。その後、岩松守純は、世良田に居を移した(世良田岩松陣屋跡)。

下田島村入封と居館・下田島城 岩松豊純の子義純(のち秀純)は、最初、東叡山寛永寺の天海に仕えたが、寛文3年(1663)7月、將軍徳川家綱より100石を加増されて120石と少禄ながら旗本に取り立てられ、上野国新田郡下田島村字長福寺林に屋敷地を拝領した。秀純が賜った屋敷地は、堀之内2223坪、堀之外雑木林2万4651坪とをあわせて2万6874坪に及ぶ広大なものであり、これが本遺跡にあたる下田島城である。

岩松秀純は寛文3年9月、將軍家柄に初めて謁し(『徳川実紀』)、以来毎年12月に参府し、正月3日に登城して將軍に年頭の手賀を行うようになった。岩松家は清和源氏新田氏正統の由緒をもって、最小クラスの旗本ながらも交代寄合格となり、家格は無位無官ながら江戸城「柳の間詰」、江戸参勤にあたっては「乗物、立長柄傘・袋入傘」などを許され、「万石以上、侍従以上」の格とされた(『寛政重修諸家譜』)。大名格・高家衆並の待遇である。以後、岩松家は、富純・孝純(慶純)・義寄(温純)・徳純・道純・俊純と、代々、明治期まで下田島を領した。また、岩松慶純以降の歴代岩松家当主は、書画をよくしたことで知られており、義寄(温純)以降の四代にわたる当主の「猫絵」は有名で、「新田猫」と称され、養蚕の鼠除けの呪符として篤い信仰を受けた(落合延孝『猫絵の殿様一領主のフォークロア』吉川弘文館平成8年、神坂次郎『猫男爵』小学館平成14年)。少禄の岩松家の財政を支える貴重な収入源だったという。

岩松家「先祖書」(『新田文庫』)によれば、岩松家は選んで下田島村の内に知行地を拝領したとのことで(『太田市史』通史編近世平成4年)、当地は、天正18年(1590)以降、館林城主榑原氏領であったが、寛永20年(1643)、榑原氏の奥州白河転封を機に幕府直轄地へと支配替えされていた。村高536石余の下田島村は、岩松氏の入封によって幕府直轄領との二給地となり、後、享保15年(1730)には幕府直轄領のうち267石余が旗本桑山氏知行地に、残る148石が旗本三枝氏知行地となって、旗本三給地へと変化し、幕末に至っている。

岩松家旗本身分取立当時の分限帳は存在せず、わずかに幕末維新期の嘉永6年(1853)「国々連面附覚帳」

〔新田文庫〕、明治元年（1868）9月「譜代人口調帳」（同）、明治元年10月「人数附」（下田島戸澤家文書）の3部が残るだけであるが、それらによれば大体20名前後の家臣がおり、堀外屋敷地内に彼らの屋敷があった。特に「御近所組」と呼ばれた関根・藤生・戸澤・柏木（後に亓家）の四家のうち、関根家を除く三家は、下田島城堀之内の入口筋に近い付近に、また、家老小幡家は堀之内追手のすぐ南側に、それぞれ屋敷を構えていたようである。岩松家には家臣のほか、金山城主時代の旧臣の系譜を引く由緒の者などが特に出入りを許されており、彼らは関東一円はもとより奥羽・信濃・甲斐・越後などにも及んでいる。尊皇思想の昂揚に伴って、南朝忠臣新田氏の末裔である岩松家の社会的な名声は次第に高まり、維新時には1000名にも及ぶ人士が出入りしていたと言われている。

幕末、岩松家当主の俊純は、新田氏を称するとともに「新田勤王党」を組織し、勤王倒幕活動をしている。この功と南朝忠臣新田氏の後裔たるをもって、新田俊純は明治16年（1883）、特旨をもって華族に列せられ、男爵に叙せられ、忠純・義美と爵位を継承。家系は現在に至っている。

第3節 下田島城調査の変遷

保存された下田島城の遺構 下田島城は、単郭平城の基本構造がよく保存された事例として県内随一の遺跡であったが、昭和35年、群馬県立太田西女子高等学校の前身にあたる群馬県立尾島女子高等学校の当地移転による校舎建設に伴い、本郭の追手口及び南辺と西辺の土塁と堀跡の結節点である南西隅部の櫓台跡一帯を除いて破壊されてしまった。現在もその部分は、度重なる校舎・校地の造成工事による破壊を辛うじて免れ、「新田の杜」として校地内に保存されている。

群馬県内における中・近世城館城郭研究の第一人者であった山崎一氏が昭和40年（1965）に調査されたときには、東西100m、南北120mの長方形の堀構えの本郭範囲と高さ約2.5～3mの土塁、北西・南西隅の櫓台跡、南面・東面の虎口などが確認できたという。

保存されている南辺と西辺の土塁と堀跡の結節点である南西隅部の櫓台跡一帯では、南側に約20m、西側に約45mほど堀跡と土塁跡が残っているが、西辺の堀・土塁と南辺のそれとの交差の角度は直角ではなく、南辺を基準とすれば、西辺が約9度外（西）側に開いている。わずかに残る虎口からの方向を遮断する葦土居は西辺土塁の走向にはほぼ直交しており、南辺土塁と葦土居との走向のズレの理由はまだ解明されていない。南西隅の櫓台跡では、南側だけほぼ堀幅分張り出しており、南虎口と南前面の防禦には特に威力があったものと考えられている。

山崎一氏の研究 山崎氏は、その著書「群馬県古城古塁址の研究」上（1978）で、この城館の構築上の特色として、①西北・西南両隅に隅櫓台があり、西北の櫓台がとくに顕著で、西と北とに大きく突出し、北面・西面を防禦する態勢にあること。②西南隅の西面が張り出さないのは、西北櫓台との間が相横矢になることを避けるためであること。③追手虎口は土橋を備え、内側に順の葦土居が認められること。④東北・南東に隅櫓がなく、東側に外郭が存在した可能性があること。⑤北東隅の角は鬼門除けの角欠きになっていること。などの5点を挙げておられる。

また、築城年代については、西南隅と西北隅櫓台との間での相横矢を回避措置で、櫓相互の距離が100m以上もあることや、南側追手口に付随する葦土居の存在がとられていることなどから、鉄砲を用いるようになった戦国期以降の築城と考える。ちなみに、上野国新田郡地方における鉄砲使用の史料上の初見は、

長楽寺蔵「永祿日記」永祿8年(1565)9月27日条であり、本城館の築造年代を鉄砲戦導入以降とみるならば、築造年代の上限は16世紀後半ということになる。ただ、下田島城の築城にかかる記録は一切無い。

樋口良夫氏の見解 樋口良夫氏によれば、昭和8年(1933)の地図図によれば、下田島城所在地の小字名は「長福寺」であり、この「長福寺」字名は、仁和3年(1168)の新田義重置文に見える19カ所の土地のうちの「丁ふくし」に由来するとみられるが、長福寺なる寺院の来歴や所在は全く不明である。樋口氏は、もともとこの土地に「長福寺」なる寺院が営まれていたものを戦国時代に城館に改修し、それが廃城になったものを、寛文3年の岩松純徳の交代寄合格取り立てに伴って岩松氏の居館として改修されたものと考えておられる(同「二区」、群馬県教育委員会『西田島遺跡発掘調査報告書 昭和61年度 昭和62年3月』)。

本遺跡の北東約400mの位置には、国道354バイパスの建設工事に先立って発掘調査が行われた長福寺遺跡があり、古墳時代中～後期の竪穴住居跡1、平安時代の竪穴住居跡2、中世の土坑墓3などの遺構とともに、1辺57m・幅約3mの北西部で直角に曲がる堀跡が検出されている。規模や形態からみて、在地土豪か有力農民層の屋敷に伴う遺構とみて間違いない、15世紀から18世紀の陶磁器類が多数出土している。あるいは本遺跡で検出された城館に関わる遺構である可能性もあり、「長福寺」なる寺院との関連も一方で想定できそうである(太田市教育委員会『長福寺遺跡発掘調査概報』1992)。

昭和61年度の調査にみる下田島城の遺構 昭和61年度に行われた発掘調査では、下田島城のほぼ中央部西端の調査区において、北北西の方向に走向する西辺堀跡を南北長約9mにわたって検出している。ここで検出された西辺堀跡の走向は、西南隅部で保存されている西辺土塁・堀跡の走向とほぼ一致していた。

検出された西辺堀跡の断面は、逆台形状に二段掘りされており、遺構確認面では上幅6m、底部幅1.1m、深さ2mで、深さ1.2mの位置に犬走り状の段がつく。

西辺堀跡から東へ約6mまでは土塁跡で、校舎建設時に完全に削平されていたという。西南隅部を中心に遺る南辺及び西辺の土塁の現状からみて、本来、土塁は高さ4～5mあったであろうことが推定でき、堀底から土塁頂上までの比高差は約6～7mとなる。堀跡からのものを含めて、下田島城に関わる時期の遺物は全く出土していない。

昭和63年度の調査にみる下田島城の遺構 下田島城北西隅櫓台跡を破壊して建てられた県立太田西女子高等学校体育館の建替えに伴う調査で、北西隅櫓台の基底部と本郭北辺の堀跡2条が検出された。

北辺の1号堀跡は上幅6.2m・底幅3.6m・深さ1.6mで、断面は逆台形状を呈し、江戸時代後期以降に掘削されたものとみられる。

1号堀跡の約20m内側に並行する2号堀跡は、上幅6.1m・底幅2.1m・深さ1.5mで、底部を部分的に深く掘り穿めた箇所があり、そこでは断面が薬研状の二段堀状を呈し、61年度調査で検出された西辺堀の横相と類似している。2号堀跡はまた、北西隅櫓台の周囲を巡っている。1号堀跡と2号堀跡との接続部分の埋土の堆積状況から、2号堀跡は、築城時の北辺及び北西隅櫓台の周囲を巡る堀で、江戸時代後期以降にその外側に新たな北辺堀として1号堀跡が掘削されると、櫓台より東側の部分では埋め立てられていたことが判明している。両堀跡ともに18世紀末～19世紀後半の陶磁器類が出土している。19世紀前～幕末期の遺物が中心である。

江戸時代後期以降に本郭の北辺を約20m北に張り出し拡張していることが判明したわけであるが、その時期や理由・背景などについては、現在のところなお不明である。

また、北西隅の櫓台は、それ以前から残存していた円墳の墳丘を利用したもので、平面径22mの円形形状を呈し、北面と西面とが張り出す形状であったことも判明している。

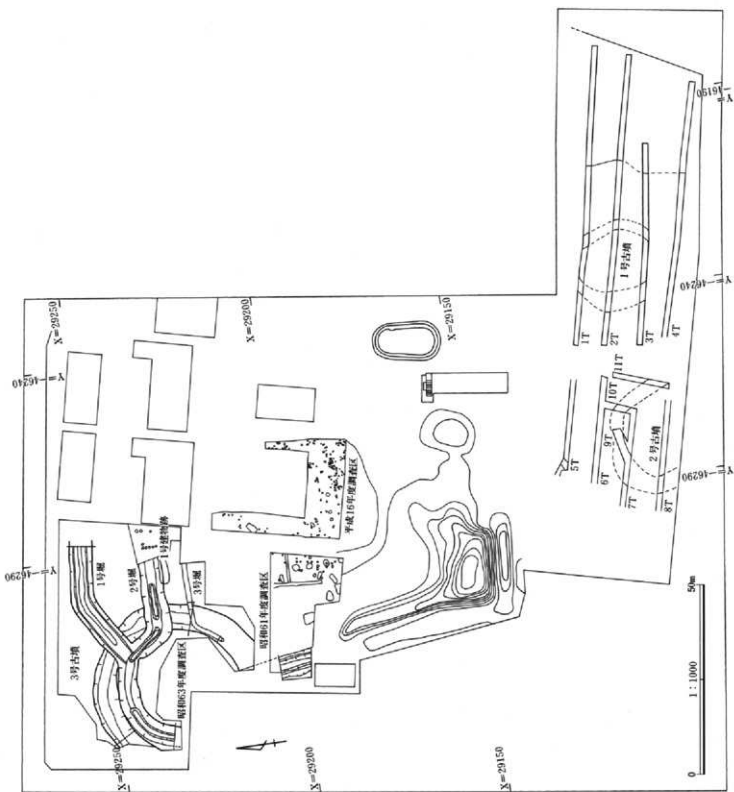


图3 西田島遺跡全体图

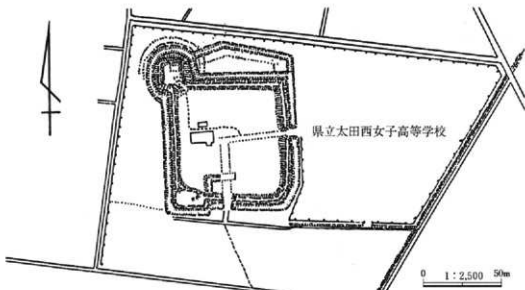


図4 下田島城跡強固 (山崎一氏原図、岡氏「群馬県古城遺址の研究」上 1978の一部修正、群馬県教育委員会「吾田島遺跡」) -下田島城の調査(昭和63年より)

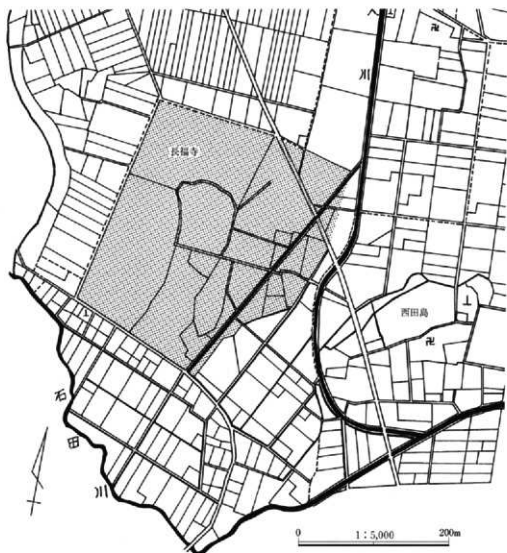


図5 下田島城周辺地積図 (昭和8年頃)

第3章 発見された遺構と遺物

今回の調査は、下田島（岩松）城のほぼ中央部にあっている。なお、先述したように調査区は以前に同校のプールがあった場所にあっていて、調査区の中央部から北よりにかけて、調査対象面積の約半分近くが破壊されていた。検出された遺構は、古墳掘跡1、中近世ピット群184、近代礎石建物跡1である。

第1節 古墳時代の遺構と遺物

・西田島4号墳

調査区の南東隅付近で、古墳の周溝跡が1条検出された。検出できたのは約1/4弱程度で、残り3/4は調査区外南側及び東側にかかっている。校内では過去の調査においてこれまでに3基の古墳跡が検出されており、これが4基目の古墳と言うことになる。これまで調査によって検出された古墳はいずれも円墳である。この古墳が検出された位置から南西方向に約30m離れた位置に土塁に接して存在する下田島城南西隅櫓台跡の高まりが、昭和63年度発掘調査で確認された北西隅櫓台同様、かつての古墳の墳丘の一部を土塁の一角に取り込む形で利用したものと見られることから、少なくともこれまでの調査で判明した限り、校地一帯では約20～40m程度の間隔で古墳が群集して築かれていた可能性が高い。

周溝跡 周溝の上幅は、現状で約3.5m、深さは0.4mで、推定復元で直径約25m前後の円墳である可能性が高い。墳丘は完全に削平されており、周溝底部が辛うじて検出できたにすぎず、埋土中にも明瞭な火山灰の堆積や特徴などを見いだすことは出来なかった。また、調査範囲内では主体部の痕跡を見いだすことも出来なかった。

土器 周溝埋土中より5世紀第4四半期頃の年代観を有する土師器杯が2点出土した（1・2）。1・2ともに口縁・体部内外面横撫で、底部外面寛削り、底部内面撫で。丸底で稜を有する典型的な鬼高期の杯である。口縁の造り及び体部の立ち上がりはシャープで丁寧な造作である。色調は1が橙色、2がにぶい橙色を呈し、ともに焼成は良好。胎土は緻密で微細な白色粒子、砂粒、雲母片を若干含んでいる。

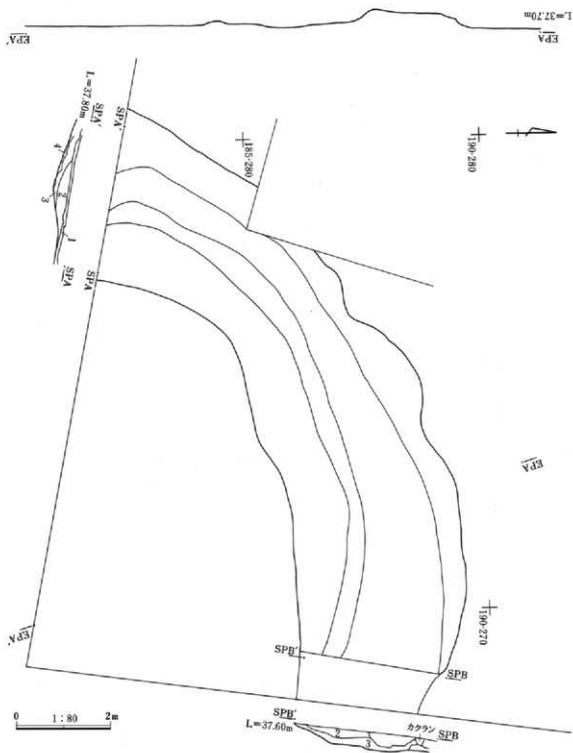
埴輪 また、周溝内からは円筒埴輪の破片が5点（3～7）出土している。

3は円筒埴輪の底部片。底径の約1/8が残存。底部から約10cmのところ突帯がつく。突帯は上からの貼付痕が明瞭で粗い造りである。復元底径は約22cm。色調はにぶい橙色を呈し、焼成は良好。胎土は緻密で微細な白色粒子が少量、砂粒を若干含む。調整は斜方向刷毛目。底部は撫で調整後、棒状圧痕で若干起伏に富む。内面は撫で調整後下方から斜方向刷毛目。形状・調整とも昭和63年度調査において3号墳周溝内から出土した円筒埴輪12によく類似しており、时期的な近似が想定できる。

4は、残存長約7cm程度の円筒埴輪副部小片。鈍い橙色を呈し、焼成は良好。胎土には微細な白色粒子・砂粒を微量含む。調整は縦方向刷毛目。内面は斜方向撫で。

5も残存長約9cm程度の円筒埴輪副部小片。鈍い橙色を呈し、焼成は良好。破片は中央に突帯があるが、貼付後、丁寧に撫で調整されており、貼付痕は認められない。胎土には微細な砂粒をやや多く含む。調整は縦方向刷毛目。内面縦方向撫で。指頭痕が残る。

6・7はともに残存長約5cmの円筒埴輪小片。橙色を呈し、焼成はきわめて良好。胎土に微細な砂粒を多く含む。調整は、6は斜方向、7は縦方向刷毛目。内面は6は斜方向刷毛目後撫で、7は縦方向刷毛目。



西田島4号墳埋土層

- | | |
|------------|-----------|
| 1. 灰黄褐色粘質土 | 3. 暗黒褐色土 |
| 2. 暗灰黄褐色土 | 4. 黄褐色粘質土 |

図6 西田島4号墳全体図

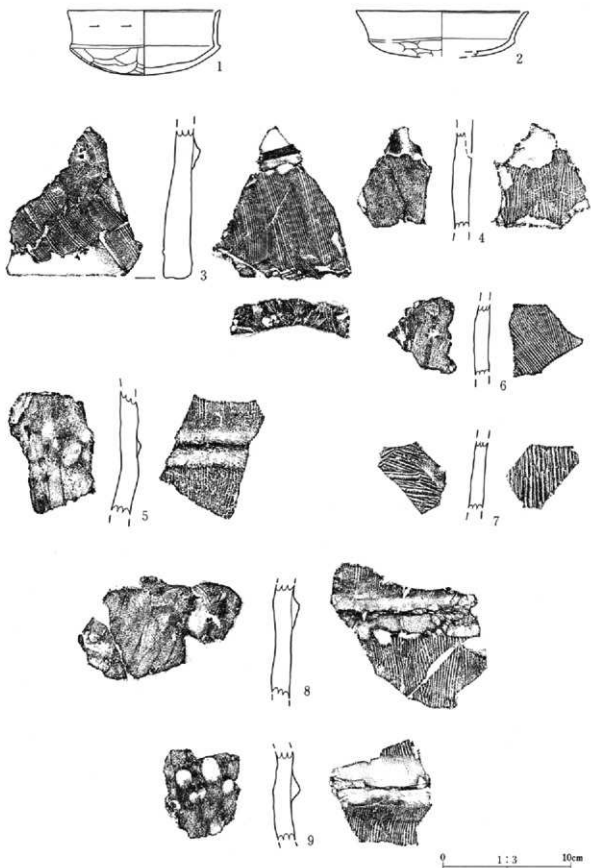


図7 西田島4号墳周溝内出土遺物(1~7)、関連遺物(8・9)

114号ピット及び180-265Gr. 攪乱からも円筒埴輪片が1点ずつ出土しており(8・9)、当古墳との関連が想定できる。8は、残存長約12cm程度の円筒埴輪の薄片。橙色を呈し、焼成は良好。胎土には微細な白色粒子、砂粒を少量含む。縦方向刷毛目。破片の上端付近に突帯があり、貼付け痕が明瞭に残る粗い造りであり、突帯の付け方は3によく類似する。内面は縦方向の撫で、指頭痕が明瞭に残る。9は、残存長約6cm程度の薄片。橙色を呈し、胎土には微細な白色粒子を少量と、微細な黒色粒子をやや多く含む。突帯が残るが貼付け痕は明瞭で粗い造りながらも、貼付け後の撫で調整がなされ、3や8に比べればやや丁寧な造作である。縦方向刷毛目。内面は縦方向の撫で、指頭痕が明瞭に残る。

年代 周溝内から出土した2点の土師器杯は5世紀第4四半期頃の年代観であるが、円筒埴輪の突帯の貼付け後の調整が粗いことや、3で底部から突帯まで位置が比較的短いことなど、出土した埴輪の特徴からみれば6世紀前半頃のものともみられる。遺物はいずれも周溝埋土内からの出土であり、明確な年代決定の根拠とするのに乏しいが、特に埴輪は昭和63年度調査の3号墳周溝内出土のもの共通する特色を有しており、ほぼ同年代のものと考えて大過ない。西田島4号墳もおよそ5世紀末～6世紀前半頃のものと考えられる。

第2節 近世・近代の遺構と遺物

(1) 柱穴跡群

下田島城の施設を構成していたとみられる掘立柱建物跡の柱穴痕跡が調査区のほぼ全域にわたって184基検出された(付図参照)。いずれも径約20～40cm、深さ約20～50cm程度で、上平面正方形を呈し、小規模ながらしっかりとした堀方を有するものが多いが、相当のばらつきも認められる。元々の地表面が校地の造成でかなり削平されているため、柱穴の深さも、建物存在時の掘り方を示しているとは考えられない。建物の平面形状を復元できるものはほとんど存在しなかった。埋土はいずれも黒褐色土、黄褐色ロームのブロックや粒子を多量に含む。埋土中からの遺物の出土は皆無に等しい。

(2) 1号柱穴列跡

調査区の中央部南寄りには、1対2基ずつの柱穴が3個、心々間2.5m間隔で全長5.5mにわたって東西方向に方位軸に乗って一直線に並ぶ柱穴列が検出された。柱穴はそれぞれ直径約20cm弱で、遺構確認面からの深さは約10cm前後。平面形は画一的な隅丸方形を呈する(西61号 pitA 径20cm・深さ9cm、pitB 径15cm・深さ8.2cm、中62号 pitA 径16cm・深さ7.7cm、pitB 径16cm・深さ4.8cm、東63号 pitA 径20cm・深さ19.3cm、pitB 径20cm・深さ10.5cm)。それぞれ対になる柱穴相互の間隔は約10～20cmである。

下田島城の南側追手虎口の奥、ちょうど真正面の位置に当たり、柱穴列も東西軸正方位に乗っているところから見て、下田島城南大手口の障壁の柱穴、あるいは威儀を飾った轡竿の痕跡の可能性が考えられる。

なお、これらの柱穴群の埋土中からは、遺物は全く出土していない。

(3) 2号礎石建物跡

調査区の南側中央東寄り、1号柱穴列よりもさらに南側に、近代頃のものと考えられる礎石建物跡の東西方向の1辺分、礎石2基が検出されている。礎石の間隔は心々で4.7m。正方位に乗る。

校地の西北隅付近で昭和63年度の調査時に検出された1号礎石建物跡は、江戸時代後期に掘削された下田

鳥城北辺堀（1号堀跡）の埋土を掘り込んでいることから、明治以降のものと考えられているが、本遺構も構造から見てほぼそれと同時期のものともいえる。なお、遺物が全く伴わないことから、詳細な年代については不明である。

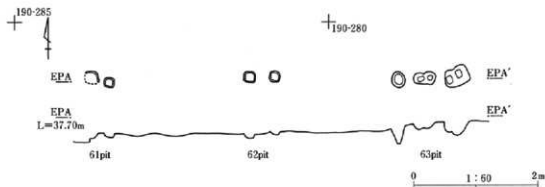


図8 1号柱穴列跡平面図・エレベーション図

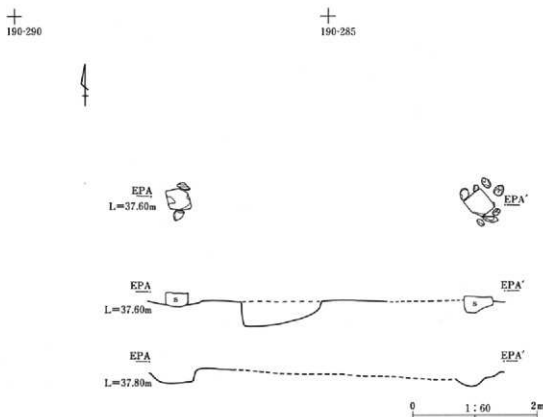


図9 2号礎石建物跡 平面図・エレベーション図・断面エレベーション図

(4) 遺構外出土遺物

攪乱埋土から出土した遺構に伴わない遺物のうち、下田鳥城に関連しそうな遺物22点を取り上げる。

①近世軒瓦

軒丸瓦 10・11は軒丸瓦。10は180-270Gr. 攪乱内、11は180-265Gr. 攪乱内出土。10は瓦当下面部約2/3と

丸瓦部接合部分が若干残存。11は瓦当面のみが約1/4程度残存。10・11とも灰色を呈し、焼成は良好。胎土は非常に緻密で微細な白色粒子・雲母粒子を若干含む。10は瓦当面は范型、外縁部連続文、中心部三巴陽刺。11も同様の意匠と考えられる。10は瓦当面外縁角及び丸瓦部外面艶削り後弱い撫で、内面縦方向撫で。

軒平瓦 12・13は軒平瓦。ともに180-270Gr. 攪乱内出土、瓦当面の一部が残存するのみ。12は瓦当面に向かって右端部が残存。13は瓦当面の中心部から向かって左側が若干残存。ともに灰色を呈し、焼成は良好。胎土は緻密で、微細な白色粒子及び砂粒を多く含む。瓦当面は范型、飛雲文陽刺。ともに瓦当面及び平瓦部上下面横方向の撫で。

②近世・近代陶器類

擋鉢 14は堺擋鉢。180-270Gr. 攪乱内出土。口縁部のごく一部が残存する小片。灰赤色を呈し、胎土は緻密で、白色粒子及び砂粒を少量含有。焼成は良好。口縁内外面・体部外面横撫で。口縁部内面に沈線2箇所。内面擋り部は縦方向の串書き。この種の堺擋鉢は19世紀、天明年間以降に関東に入ってくる製品である。

陶器 15は平面長方形の盤。180-270Gr. 攪乱内出土。口縁部から底部にかけての小片。口縁部内側に花卉文。底部に「光濱□」と3文字分の文字が記されている。外面は無文。焼成不良。釉薬もかからず不良品と考えられる。時期不詳。

16は瀬戸美濃系の片口鉢。210-285Gr. 出土。口径復元長20cm、底径復元長12.3cm、器高12.6cm、注口部長3.5cm。約1/3残存。体部下位は丸みを有し、体部中段から口縁部にかけて直立する。口縁部には折り返し段を有する。底部～体部轆轤調整回転艶削り。高台は削出し。口縁部外面に沈線。見込み目縁3箇所。外面は体部下面、口縁部より約10cmのところまで淡黄色の釉がかかり、体部最下部と底部は無釉。内面は口縁部から1～2cmまでのところにしか釉薬がかかっていない。内面にほとんど釉薬がかかっていない点は、片口鉢の機能から見て奇異である。18世紀。

17は関東系陶器蓋。180-270Gr. 攪乱内出土。径7.9cm、完形。平面円形、扁平形状を呈し、柄みは付かない。轆轤成形、内外面艶削り。内面に外縁から内に約1cmの箇所に段が付き、段の高さは0.4cm、内径は6cm。外面には黄褐色釉がかかり、白色粘土による筒書きで笹の文様が描かれている。表現は稚拙。内面は無釉、にぶい黄褐色を呈する。胎土は緻密で非常に微細な黒色の粒子を少量含む。焼成は良好。幕末～近代頃か。

18～20は瀬戸美濃製灯火器受皿。ともにほぼ完形。平面円形。内面褐色釉。錆釉施後、底部～体部外面の釉薬を拭き取る。轆轤調整、体部内外面艶削り、底部回転糸切り。受け部に一箇所、U字型の流入孔が設けられている。受部の貼り付け調整は比較的丁寧である。焼成は良好で、胎土は緻密。

18は210-285Gr. 攪乱内出土。口径10cm、受部径7.1cm、底部径5cm、器高2.1cm。19は180-265Gr. 攪乱内出土。口径9.7cm、受部径6.6cm、底径4.6cm、器高2.1cm。20は180-270Gr. 攪乱内出土。推定口径10.5cm、受部径6.9cm、底部径4.7cm、器高2.1cm。いずれも18世紀後半～19世紀初頭頃のものと思われる。

21は、近畿系陶器碗(湯呑)。ほぼ完形。210-285Gr. 攪乱内出土。口径9.3cm、底径3.3cm、器高5cm。内外面灰白色釉がかかり細かい器面には非常に細かな貫入が全面にみられる。焼成は良好。胎土は非常に緻密で夾雑物をほとんど混入しない。全面回転艶削り調整。信楽焼か?。幕末～明治初期頃。

22は、瀬戸美濃系腰鉢。180-265Gr. 攪乱内出土。約1/2残存。口径推定10cm、底径推定4.8cm、器高5.7cm。口縁部外面から体部及び底部内面にかけて全面に灰白色釉がかかり、体部外面中段から底部外面にかけて褐色の釉がかかる。焼成は良好。胎土は緻密で黒色の微細な粒子を少量含有する。轆轤成形、全面回転艶削り調整。削り出し高台。体部外面に轆轤目が顕著。18世紀後半。なお、昭和63年度調査時にも校地北西隅3号掘跡確認面上からも同種同形のものが出土している。

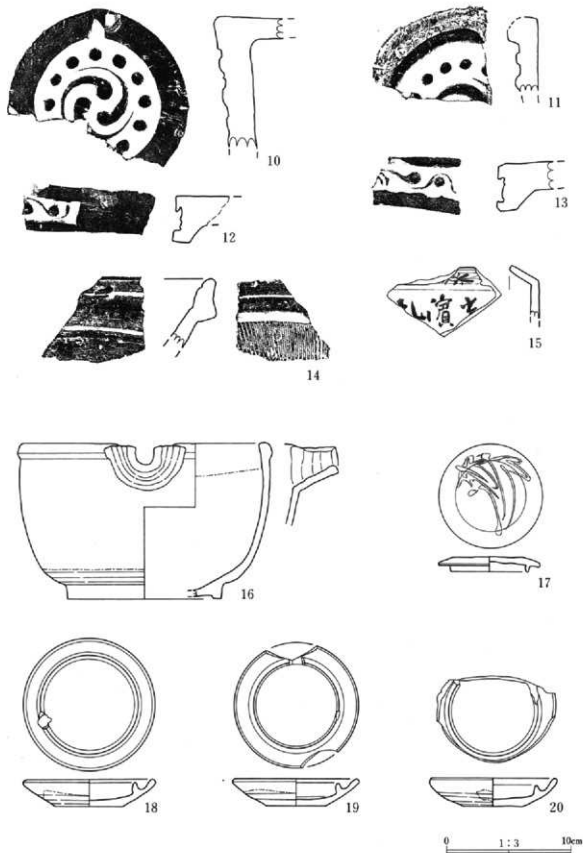


图10 濠沟外出土遗物 (1)

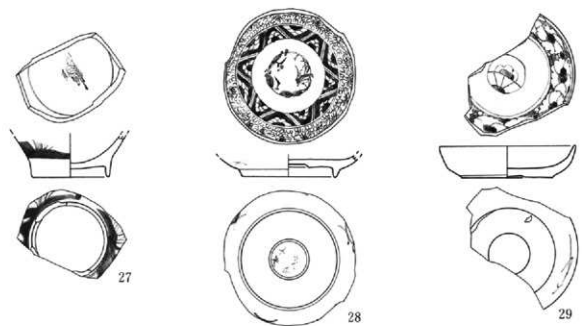
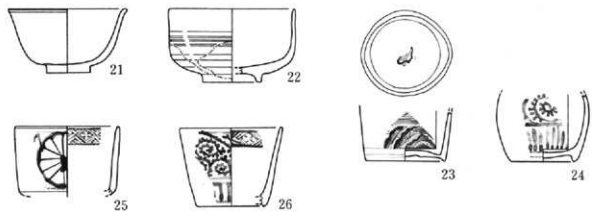


圖11 遺構外出土遺物 (2)



図12 遺構外出土遺物 (3)

③近世肥前系磁器 (染め付け)

肥前系磁器10点 (23~32) を取り上げる。肥前系磁器はいずれも18世紀後半~19世紀初頭頃のもので、染め付けである。

23 猪口。210-285Gr. 攪乱内出土。底部全較と体部が底部の周りにわずかに残る程度。底径は6.1cm。内外面施軸。いわゆる蛇の目凹型高台。底部内面に文様あり。

24 瓶。180-270Gr. 攪乱内出土。底部から体部のごく一部が残る破片。復元底径4.8cm。内面無軸。外面体部下面縦方向竪文。体部中段蜻唐草文。全面轆轤成形、体部回転寛削り調整、削出高台。

25 刷形碗。180-270Gr. 攪乱内出土。口縁部から体部下面の一部が残る小片。推定口径8.4cm、推定器高5.4cm。内外面施軸。体部外面網の目状格子文及び十二弁菊花文。内面は口縁部から約1.5cmまでの範囲に帯状に花菱繁文。全面轆轤成形、体部回転寛削り調整。

26 広口碗。180-270Gr. 攪乱内出土。口縁部から体部下面の一部が残る小片。推定口径7.8cm、推定器高6.1cm。内外面施軸。体部外面上2/3蜻唐草文、体部下部雷文。口縁部内面、口縁より約1.5cmの範囲に帯状に花菱繁文。文様配置は25によく類似。ただし口縁部上部内面の花菱文は25の施文の方が格段に丁寧である。全面轆轤成形、体部回転寛削り調整。

27 広東碗。180-270Gr. 攪乱内出土。底部のほぼ全部と体部のごく一部が残る小破片。復元底径6cm。内外面施軸。底部内面に水草文、外面に山水文、描画技法は稚拙。全面轆轤成形、体部回転寛削り調整。

28 皿。180-270Gr. 攪乱内出土。底部のみが残る破片。底径7.8cm。底部外面は蛇の目凹型高台の外側にさらに径広く貼付高台をつける。底部外面蛇の目高台内区に「成化年製」銘。銘字書体は稚拙。貼付高台内は蛇の目高台内区を除いて軸を拭き取っている。そのほかは内外面すべて施軸。底部内面には三重円を描き、最外縁及びその内側、中心部に文様を描く。体部外面にも文様が描かれる。全面轆轤成形、底部回転寛削り調整。

29 皿。180-270Gr. 攪乱内出土。約1/3が残る。推定口径10.8cm、底径7.1cm、底部は蛇の目凹型高台。高台部軸拭き取り、それ以外は全面施軸。口縁部から体部内面にかけて花菱文、底部内面中央に花卉文、体部外面に松葉文。全面轆轤成形、体部・底部回転寛削り調整。

30 皿。180-270Gr. 攪乱内出土。底部のほぼ全部と体部のごく一部が残る破片。底部径5.7cm。内外面すべて施軸。底部内面に山水描画、ただし表現は稚拙。焼成不良。全面轆轤成形、底部回転寛削り調整。

31 皿。180-270Gr. 攪乱内出土。底部の約2/3と体部のごく一部が残る破片。底径6.8cm。高台面のみ無軸。23~30に比べて軸の状態や全体の成形は格段に精緻で良好。23~30に比して高級品と考えられる。底部外面、

高台内見込みに印文様の銘、底部外面高台外側に二重圏線、内面には松竹梅文描画。全面轆轤成形、体部・底部外面回転削り調整。貼り付け高台。18世紀。

32 皿。180-265Gr. 攪乱内出土。底部の約1/3と体部のごく一部が残る破片。器形・法量・成形・施軸・文様とも31と同一。31とセットを構成した食器類と考えられる。31同様、23～30に比べて軸の状態や全体の成形は格段に精緻で良好。18世紀。

④その他の遺物

33 砥石。180-270Gr. 攪乱内出土。半分欠損。欠損面以外全面使用。表面は摩耗により大きく窪んでいる。

34 銭貨。寛永通宝。180-265Gr. 出土。外縁部約1/4が欠損。

以上、今回の発掘調査で出土した下田島城関連と考えられる出土遺物は、いずれも遺構に伴って出土したのではなく、その点が資料的には弱いところであるが、18世紀から19世紀頃のもので、中でも18世紀後半から19世紀初頭頃のものが多いようである。

調査区内では、建物施設の解体・整地に伴って掘削されたと考えられる攪乱が多く見つかっており、これらの遺物の多くは、近現代の陶磁器・金属器・プラスチック器・ガラス器などに混じって出土したものである。こうした攪乱には、明治期に明らかに下田島城の建物施設の解体に際して廃材廃品の投棄のため掘削されたものも存在しているが、多くは、県立尾島女子高校・太田西女子高校の施設建設あるいは建替え、整地などに伴って掘削されたものも存在している。

昭和60年度・61年度の調査では、下田島城関連の遺物は全く出土しておらず、また昭和63年度の調査で出土した陶磁器類の年代観も、今回出土した陶磁器類のものと少なからず類似している。

遺構に伴って出土したのではなく、近現代の廃品と共に出土したものとさへ含まれているとはいえ、それにしても18世紀後半から19世紀の前半にかけての出土遺物が比較的多くまとまっている点は、それらの示す年代が、下田島城におけるなんらかの画期の存在を示すものかもしれない。

まとめ

今回の西田島遺跡の発掘調査は、対象面積も狭く調査期間も短い小規模な調査であり、調査区も県立太田西女子高等学校のプール跡地に当たっていたため、現地表面下の掘削による破壊も、これまでの調査区以上に甚だしく、遺構の残存状態は非常に良くない状況にあった。特に遺構確認面の削平状況は誠に酷い状態であった。しかしながら、過去3次にわたる発掘調査では全く検出されていなかった下田島城郭内建物の柱穴を検出でき、また、下田島城とは関係するものではないが、完全に削平されていて、現地表面では存在が全く確認できていなかった古墳の存在を明らかにし得たことなど、短期間・小規模な発掘調査でありながらもそれなりの成果が得られた。

特に、県立太田西女子高等学校内においては、未調査で保存されている下田島城西南隅階台に後世転用されたと考えられる高まりをあわせて考えると、少なくともこれまでの調査で判明した限り、高々160m四方の範囲に、少なくとも5基の古墳が、約20～40m程度の間隔で群集して築かれていた可能性が高く、校地一帯の下田島長福寺地区には、古墳時代後期の群集墳が営まれていたことになろう。

下田島城に関しては、昭和63年度の調査にかかる発掘調査報告書において、当時の調査担当者であった大栗勇一氏は、昭和63年度調査後の下田島城に関する今後の調査にむけての課題として、①江戸期以前における外郭の有無及び規模、②郭内建物の状況、③2号堀（昭和63年度調査）底部の深堀溝状遺構の性格、④本郭北部拡張の時期・要因・背景、⑤当初の築城時期や築造者や岩松氏入城前の城主、などの解明を掲げておられる（群馬県教育委員会『西田島遺跡Ⅱ—下田島城跡の調査—昭和63年度 平成元年』）。

今回の調査区は、下田島城郭内に当たっており、外郭の土塁や堀跡にかかるものではなかったため、昭和63年度調査後に今後の課題として設定されたもののうちの①・③・④にかかる点は、解明なり、あるいは解明にいくらかでも近づける要因は最初から望むべくもなかった。しかしながら、課題②の郭内建物の状況については、建物跡の平面構成は現時点では不明ながらも、下田島城郭内建物跡の柱穴痕を184基検出することが出来、また、追手口入り口正面から郭内を遮蔽するような目隠しのないしは正面の威儀を飾る幢竿とも考えられる柱穴列も検出され、今後の、校内の発掘調査において、さらに下田島城郭内の建物跡群の痕跡を見出すことの可能性を繋ぐことになった。

課題⑤については、今回の調査でも築城創建の時期を示すような考古学的な知見は全く得ることが出来ず、この点も、今後の調査がなされる際の課題として残った。交代寄合格旗本岩松家関係の江戸時代以降の史料からみれば、築城は戦国期まで遡らず、案外、寛文3年（1663）の岩松秀純の下田島村入封時築城の可能性も存在するようにも思われる。

また、課題④の、昭和63年調査時に明らかになった江戸時代後期以降の本郭の北側への拡張に関してであるが、もちろん直接それを考古学的に解明できるような成果が今回の調査で得られたわけではない。ただ、昭和63年度調査時と同様、今回の調査においても、下田島城関連と考えられる近世の遺物は、いずれも18世紀以降のもので、特に18世紀後半から19世紀の前半にかけての出土遺物が比較的多くまとまっている点が、本郭北側への拡張を含む下田島城改修の時期と重なっていることは示唆的である。あるいは下田島城改修時に、北側への本郭拡張にとどまらず、大規模な郭内建物の改変・整理が行われ、それによって18世紀以前の遺物がほとんど綺麗に一掃されてしまい、結果として出土する遺物が18世紀以降の資料に限られてくるという可能性が考えられなくもない。ただ、その時期の下田島城改変の理由は、既存文献からは全く不明である。

いずれにしても、岩松氏及び下田島城に関しては史料面の検討を含めてまだまだ未解決な点が少なくない。今後の調査の進展に期待したい。

参考文献

- ・群馬大学附属図書館編 『新田文庫資料集』Ⅰ 昭和61年
- ・群馬県史編纂室編 『群馬県史 通史編』3～6 平成元～4年
- ・太田市史編纂委員会編 『太田市史 通史編中世』 平成9年
- ・太田市史編纂委員会編 『太田市史 通史編近世』 平成4年
- ・新田町誌編纂委員会編 『新田町誌4 新田荘と新田氏』 昭和59年
- ・尾島町誌企画専門委員会編 『尾島町誌 通史編上』 平成5年
- ・群馬県教育委員会編 『西田島遺跡発掘調査報告書 昭和61年度』 昭和62年
- ・群馬県教育委員会編 『西田島遺跡Ⅱ—下田島城跡の調査—昭和63年度』 平成元年
- ・群馬県教育委員会編 『群馬県の中世城館跡』 平成元年
- ・太田市教育委員会編 『長福寺遺跡発掘調査概報』 平成4年

- ・太田市教育委員会編『史跡金山城跡環境整備報告書 発掘調査編』 平成13年
- ・山崎 一『群馬県古城墨趾の研究』上・下 昭和53年
- ・落合延孝「新田岩松氏と由緒・出入りの人々」(『群馬大学教養部紀要』26-1 平成4年)
- ・同 「年中行事からみた領主と農民—新田岩松氏の事例を通して—」(『群馬大学教養部紀要』27 平成5年)
- ・同 「歴史学からみた民俗信仰—狐憑・疫神・疱瘡と岩松氏の除札」(『群馬民俗学の軌跡』 換呼堂 平成5年)
- ・同 「出入り関係の形成と新田岩松氏の権威の浮上」(『関東近世史研究』36 平成6年)
- ・同 「武家屋敷への駆入り史料—新田岩松氏の日記より—」(『群馬大学社会情報学部研究論集』 創刊号 平成7年)
- ・同 「猫絵の殿様—領主のフォークロア」 吉川弘文館 平成8年
- ・神坂次郎『猫男爵 (キャット・バロン)』 小学館 平成14年
- ・高木 侃『緑切寺講徳寺の研究』 成文堂 平成2年
- ・網野善彦・石井進・福田豊彦監修『よみがえる中世5 浅間火山灰と中世の東国』 平凡社 平成元年
- ・鶴崎裕雄「上野国国人領主岩松尚純の連歌とその資料」(『帝塚山学院短期大学研究年報』28 昭和55年)
- ・飯森康広「中世後期館跡とその周辺構造—群馬県下植木町田遺跡を中心として—」 (『信濃』51-10 平成11年)

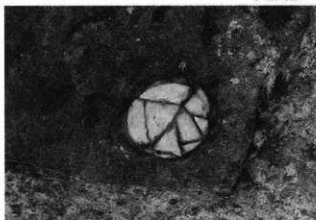
報告書抄録

書名ふりがな	にしたじまいせき
書名	西田高遺跡
副書名	太田西女子高等学校フレックス棟新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	370
編著者名	高島英之
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20060130
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県勢多郡北橋村大字下箱田784-2
遺跡名ふりがな	にしたじまいせき
遺跡名	西田高遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんおおたししもたじま
遺跡所在地	群馬県太田市下田島1243-1
市町村コード	10205
遺跡番号	40501
北緯(日本測地系)	361544
東経(日本測地系)	1391904
北緯(世界測地系)	361555
東経(世界測地系)	1391853
調査期間	20041001-20041130
調査面積	1180
調査原因	学校建設
種別	古墳/城館
主な時代	古墳/近世
遺跡概要	古墳-古墳周溝-埴輪・土師器、近世-城館跡掘立柱建物跡柱穴痕跡-陶磁器
特記事項	交代寄合格旗本岩松氏居館跡

写 真 图 版



西田島4号古墳周溝全景（南より）



西田島4号墳周溝内土師器1出土状況（西より）



西田島4号墳南壁土層断面（北より）



西田島4号墳東壁土層断面（西より）



下田島城南西辺土器跡現況（北より）



下田島城南西辺土器跡現況（東より）



下田島城南西辺土器跡現況（南より）



1号柱穴列全景（西より）



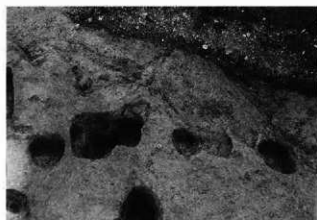
1号柱穴列全景 (東より)



1号柱穴列 pit61a・b (北より)



1号柱穴列 pit62a・b (北より)



1号柱穴列 pit63a～f (北より)



pit群全景 (北より)



東側 pit 群検出状況 (西より)



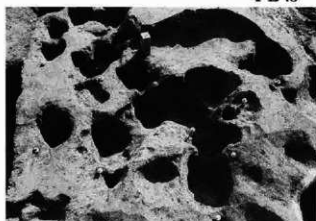
南側 pit 群検出状況 (東より)



南側 pit 群検出状況 (西より)



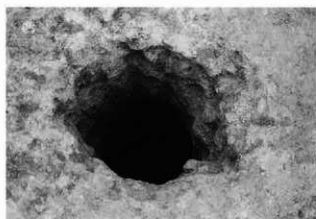
南側 pit 群検出状況 (北より)



pit 群検出状況 (pit84~93、北より)



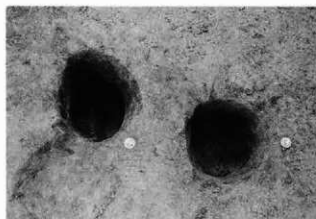
pit 群検出状況 (pit92~102、北より)



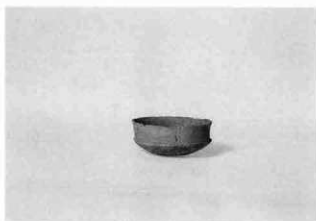
pit8 全景 (北より)



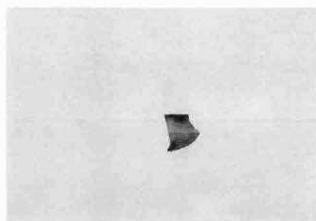
pit12 全景 (北より)



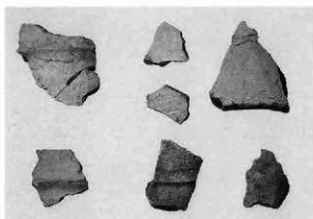
pit64・65 全景 (北より)



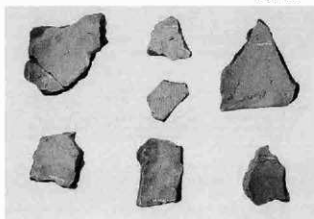
4号墳周溝埋土出土土師器杯1



4号墳周溝埋土出土土師器杯2



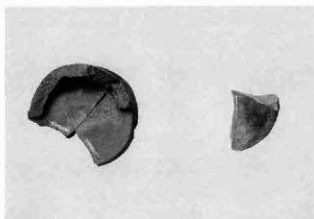
4号墳周溝埋土ほか出土埴輪片3~9・表



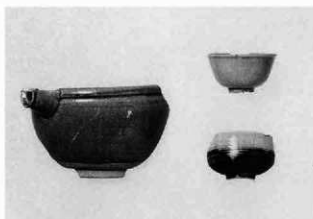
4号墳周溝埋土ほか出土埴輪片3~9・裏



遺構外出土近世軒瓦片10~13・表



遺構外出土近世軒瓦片10~11・裏



遺構外出土近世陶器片16・21・22



遺構外出土近世陶器片ほか14・17~20・33・34



遺構外出土近世肥前磁器片等15・23~32内面



遺構外出土近世肥前磁器片等15・23~32外面

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第370集

西田島遺跡 太田西女子高等学校フレックス棟新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



平成18年1月25日 印刷

平成18年1月30日 発行

編集／発行 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
〒377-8555 群馬県勢多郡北橋村下箱田784番地の2
電話 0279(52)2511(代表)
ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org>
印刷／杉浦印刷株式会社

X=29220

Y=46290

Y=46280

Y=46270

X=29220

X=29210

X=29210

X=29200

X=29200

X=29190

X=29190

X=29180

X=29180



Y=46290

Y=46280

Y=46270

付図 西田島遺跡柱穴群全体図